

南アルプス自然保護官事務所 が開設されました。

環境省は山梨、長野、静岡にまたがる南アルプス国立公園を管理する「南アルプス自然保護官事務所」を南アルプス市芦安支所二階に開設し、宮沢泰子自然保護官が二〇〇八年一月一日に着任しました。また同時に静岡市と伊那市にも事務室を開設して自然保護官が定期的に巡回して近年ニホンジカを始めとする野生動物の食圧によると思われる植相の変化やライチョウの生息域の減少等に対して迅速できめ細かな管理が期待できます。

南アルプスは日本最高標高の構造山地、アルプスの景観、花崗岩の大断層崖、圏谷等の氷河地形、貴重で多様な動植物群等の価値が評価され、昭和三十九年六月に知床、白山とともに国立公園に指定されました。

当時は厚生省の管轄で、昭和四十一年四月に初代レンジャー瀬田信哉氏（前国立公園協会理事長）が派遣され、山梨県庁にデスクを置いて、シーズン中は甲府にも帰らず各山小屋を拠点として現場で精力的に自然保護や登山者指導に当たっていました。しかし僅か一年三ヶ月で中部山岳国立公園管理員として富山に赴任して行かれて以来、南アルプスの自

然保護官は富士五湖自然保護官が併任で業務に当たっていました。このたび宮沢自然保護官が四十年ぶり南アルプス専任の自然保護官として着任したことにより、長年の念願が叶った地元では、南アルプスの環境保全や世界自然遺産登録推進に向けて大きな期待を寄せています。



芦安ファンクラブ 塩沢(久)記

南アルプス市 ふるさとづくり協議会の動き

会長 小野 隆

最近、農工商連携という取り組みが注目されています。

ここ南アルプス市でも、商工会が地元農家やNPOと協働して取り組んだ南アルプスフルーツプロジェクトが農工商連携88選に選ばれるなど、これからのまちづくりの手法として年々関心が高まっています。そんな中、今年度より農林水産省の新規事業として、ふるさと地域力発掘支援事業が始まりました。この事業は、地域住民やNPO・企業などが新たに組織した協議会単位でふるさと作りを行う計画を立案、その内容を5年間支援する事業です。今回南アルプス市でも、芦安ファンクラブをはじめ、様々な団体が集まって、ふるさと作り計画を立案しています。今回南アルプスふるさと作り計画の目標の一つとして、子どもふるさと体験受け入れ事業を考えています。それは「ふるさと夢学校」という、全国の小学生が、農山村での宿泊体験を行う文部科学省のプロジェクトへ参加し、南アルプス地域として受入できるような体制を作ることです。

南アルプス市は北岳をはじめ、すばらしい山岳景観・自然・文化を持ち、豊かな果樹資源や、信玄提関連遺跡、小笠原流礼法などの歴史資源も豊富です。

これらの地域の宝を、それぞれの団体が協力し、ひとつの教育旅行として学校に提案することで、日本中の子どもたちがこの地を訪れる新しい事業形態を作りたいと思っています。

その実現のため、来年度は、まず市内小学生を対象に、山の活動体験・歴史体験・農業体験を年間を通じ学んでもらう活動を始めます。

この活動には二つの大きな意味があります。南アルプス市は合併によってできた新しいまちですから、南アルプスの山々を眺めたことのない子どもたちもたくさんいます。この子らに、自分のふるさとを伝えていく事は大切なことです。

もう一つは、ふるさとを誇りに思うには、まず自分たちがふるさとを知らなければなりません。外からのお客様を招く前に、ここに住む子どもたちに伝え、また伝え方を自分たちが学んでいくことで、南アルプスをガイドする質を上げていきたいと思っています。また、その仕組みを整備することで、みなさんが、ふるさとの伝え手としてきちんと対価を受け取りながら活動できる事も必要だと思っています。

様々な困難はあるかと思いますが、みなさんにもこの活動へのご協力をお願いすると共に、いろいろな意見を寄せていただきたいと思います。

尾瀬・燧ヶ岳(二三五六m) 至仏山(二二二八・一m)の記録

登山口の大清水で、出発の準備をしていると、空模様はあまり芳しくなかった。ザックカバーを出したが、カッパを着けるほどではない、傘のある者は開いた。予報では、回復に向かうはずだが空は厚い雲に覆われて、僅かに覗く青空に期待して出発する。道は広く緩やかで、賑やかに喋りながら歩く、大分ゆっくりのペース。

一瀬休憩所を過ぎて、登山道へ入る、道端にヨウラクツツジの花が咲く、岩清水で休憩、しばらくすると木道になり三平峠に着く。天気は期待に反して回復しない。

大きな笹のある森林帯の下りは、木道が濡れて滑るので注意をして歩く、暫らくして尾瀬沼が見え、明るい場所に出ると、レンゲツツジ、ニッコウキスゲ、アヤメ、ワタスゲ等の黄、橙、紫、白色が目映る、下草の緑も爽やかである。賑わうビジターセンターを見学し、休憩、昼食を摂った。予定の時間より大分経過しており天候も芳しくない、ルートを検討し、三人は尾瀬沼を半周し沼尻から尾瀬ヶ原へ下り、八十三歳の清水百太郎さんを含む八人は、燧ヶ岳に登ることにした。

左に尾瀬沼、右に大江湿原の景観を堪能して林に入り、二班に分かれた、燧ヶ岳への林の中の道は、水に流れぬかるんで歩きにくいだけでなく、多くのブヨがまつわり付き休むことも儘ならない、登山道沿いの笹は刈り込んであり助かるが、道は高くなるに連れて雨水に流されて滑りやすいので、スピードも上が

らない。おまけに、視界が悪く展望も利かない。やがて、ダケカンバが出てきて少し平らな部分になり、雲の先に尾瀬沼が姿を見せた、そこから、少しでミノブチ岳に着いた。ケルンがあり、沼を見下ろすことが出来たが、燧ヶ岳山頂は雲の中に隠れる。

名残のハクサンシャクナゲをみて、右に回りこむと、見事な、キヌガサソウの群生地となった、サンカヨウも白い花を咲かせている。道が急になって、岩稜の部分で少し頑張つて三角点ピークに着いた。組板峠と言っただけあって、大きな岩が重なっている。天気が悪く時間も経過していたので、少し休んで、隣にある燧ヶ岳山頂の柴安峠に移動したが通過するだけとなった。



尾瀬ヶ原を望む

下りの途中で、尾瀬ヶ原方面の雲が切れて、至仏山と尾瀬ヶ原の展望が開けると、皆で歓声を挙げた。然し、長くは

続かず、展望は遮られ、急で長い坂道を下らなければならぬ、相変わらずブヨとの戦いもある。辛い下り坂で、何度か休憩した。漸く傾斜の少ない原生林になり、漸く木道が現れ、下田代十字路の尾瀬小屋に着いた、風呂で汗を流してビールを飲み、宿泊客では最後になった夕食を頂いた。その後、少し宴会をして眠りに就いた。

翌朝は、一転して快晴となった、塩沢、杉山啓、菊島、藤原の元気者は、朝五時に三条の滝を見学に行き、最後は時間切れで走つて、二時間と少しという驚異的な速さで戻ってきた。

完璧な天気時々爽やかな微風の尾瀬ヶ原の木道を歩く、ニッコウキスゲ、ワタスゲ、ヨウラクツツジ、ミツガシワがこぞつて咲き、サワラン、タテヤマリンドウ、ヒメシャクナゲが隠れるようにして花を開いている。花の観察や水面の光る池塘に、暫し立ち止まる。至仏山を見上げ、時々燧ヶ岳を振り返る。流れには、岩魚が泳ぎ水草が揺れ、水は澄んでいる。周りを渾木帯に囲まれた盆地のような尾瀬ヶ原は、ニッコウキスゲ、ワタスゲ、アヤメなどが所々群生し黄、白、紫色の絨毯を広げている、僅か数輪だがオゼコウホネの黄色い花も見られた。天気が良いので大勢のハイカーで賑わい、ポツカの担ぐゆうに六〇kgを超える荷物には驚く。

山の鼻で休憩、アイスクリームを食べて休憩してから至仏山を目指した。登山道の岩が滑るため上り専用と注意書きがあった。最初は森林帯で、きついが中間点辺りが森林限界でその上は、視界が広がり花も多く気持ちが良い、シモツケソウ、ヨツバシオガマ、チングルマ、キバナノコバノツメ、ミヤマダイモンジソ

ウ、ハクサンチドリ、イワカガミジョウシユウアズマギク、ムラサキタカネアオヤギソウ、イナノキンバイ、チングルマハクサンイチケ等の色とりどりの高山植物が目を楽しませてくれた。

至仏山山頂は三六〇度のパノラマで、上越国境の山々には残雪が多く見られた。昼食にして大休止、記念写真を撮影した。



定番の笑顔です！

鳩待峠への下りは、尾瀬ヶ原、燧ヶ岳の展望を楽しみながら下る、ベニサラサドウダンが多い、オゼソウの群生地があり、シラネアオイが沢で紫色の花をつけていた。途中休んでいると、単独行者がきて、峠からバス、タクシーの最終便は午後五時頃だと言われ、少し現実的になり急いで降りた。

沼田インター近くの「道の駅・白沢」の温泉「望郷の湯」で汗を流し、ソバなどを食べ、関越道、圏央道、中央道乗り継いで、山梨には、十時過ぎになってし



ベニサラサドウダン

芦安ファンクラブ 望月 記

まった。

(参加者)清水百太郎、杉山弘章、杉山啓子、塩沢裕子、依田明子、奥山かがみ、岩井友子、望月泰孝、菊島博文、藤原章雄、名執正樹 以上二人

(日程)平成二十年七月十二日(土)雨
十三日(日)晴

(一日目)大清水七・四十五→(五〇)一瀬休憩所八・四十五→岩清水九・十五(二〇)→九・五五三平峠一〇・一〇→一〇・五〇ビクターセンター→十一・四〇登山口→十四・二〇ミノブチ岳三〇→十五・〇七俎板峠二〇→十五・四〇柴安峠→十七・三十五尾瀬小屋

(二日目)小屋八・〇〇→九・四〇山の鼻一〇・〇〇→見本園一〇・二五五→十一・一〇展望台→十二・五〇中間点→十三・二〇至仏山頂十三・四十五→十六・十五鳩待峠

環境省、仙丈岳「馬ノ背」に

防鹿柵設置

九月三日、四日にかけて環境省が仙丈岳(三〇三三m)馬ノ背(二七一五m)付近のお花畑へ鹿の食害を防ぐ為に防鹿柵を設置した。環境省による南アルプス内への初めての対鹿防護柵設置と聞き、芦安ファンクラブからも宮下、大滝、花輪、依田、清水の五名が参加し、予定された作業を手伝った。

私が仙丈岳で始めて二ホンシカを目撃したのは十三年前の七月初旬、芦安中学校仙丈岳登山の下見の時だった。小仙丈ヶ岳への尾根から、五合目付近の藪沢小屋側のダケカンバ帯に身を潜めながらこっちを警戒していた二頭だった。

直感的にカモシカのテリトリーへの侵攻は心配したが、高山植物の食圧までの危機感はなかった。しかし、その後まもなく、南アルプス南部の各地でシカによる食害が騒がれ始め、ついに仙丈岳まで北上してきた。

聖平や三伏峠の植生に異変が起き始め、関係する諸団体が動き出した。様々な要因が考えられるが、鹿避け柵は一定の成果を出している。これらに関わっている南アルプス食害対策協議会や南アルプス高山植物保護ボランティアネットワークの皆さんも今回参加してくれた。シカ対策では実績と経験を持っているメンバーだけに心強い。

環境省や施工業者の方の説明を受けながら複数箇所への設置が行われた。

我々のチームは馬ノ背に向かって

登山道右にあるくぼ地状のお花畑を囲む柵の設置に取り掛かった。柵は予想していた通り強固なもので、これなら多少の雪庄にも絶えられそうだった。



まず、長さ一メートルの鋼製角パイプ杭を殆ど地中に打ち込み、その中に地表二メートルの支柱を差し込む。杭と支柱の間には防水と振れ止めのためにプラスチックのくさびを打ち込む。それから支柱固定用の長さ七十五センチの鋼製角パイプ杭を斜めに打ち込み、クランプで固定する。この状態にワイヤー入りのロープを上下と中間に張り、やはりワイヤー入りの網を張る。網裾はプラスチックの止杭で固定して完成となる。鋼製とはいえ地中に岩や石があると杭が思うように真っ直ぐに入らない。ロープで引っ張ったり、金デコで押し下りして悔が残らないような仕事に努める。我々チームの宮下の杭打ち姿に「とても?高齢者とは思えない」との周囲の声、本人は「日頃の鍛錬の賜物だよ」と軽く

かわしていた。しかし限られた時間で述べ数十本の杭打ち作業はさすがに身体に刺激的だった。女性ボランティアの参加者は我々チームの花輪、依田の二人だけで、用意した腰袋を下げ、細かい作業を軽快にこなしている姿は時期はずれに開花したハクサンフーロやシナノキンバイか!他の参加者が羨ましがっていた。

やや指導的な印象を受けた夕食後は他ボランティアとの有意義な時間を過ごすことが出来た。あちこちでの苦勞話や成果に花が咲く。そして次世代へ美しい自然を残そうとの強い気持ちや笑顔からこぼれていた。県境の無い活動を続けるシカに対し、関わり方も行政枠を越えた連携をとる必要があり、それは一日も早く、そして最善の施策のもとに実施されなければ、馬ノ背の高山植物のみならず、周辺の高山の美しく貴重な植物も「昔はきれいだった」で終わりがかねない。

芦安ファンクラブ 清水(准) 記



花菱紋と内蔵助伝説を求めて

後立山縦走記

芦安フアンクラブ 渡辺典美

北アルプスの北部、白馬三山から針ノ木に連なる稜線の山々を後立山連峰と呼ぶ。二〇〇八年夏の山行きは、後立山連峰の五竜岳から鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳、そして鳴沢、赤沢、針ノ木岳を越え針ノ木峠から雪渓下り、扇沢までを二泊三日で踏破しようという強行作戦でありました。計画段階からコース設定が二転三転した結果、最終的に井口リーダーの基、四名グループで出発することになりました。

私は今回の山行きの課題として、五竜岳の山頂に雪解け時に出現する武田菱を間近で観察することと、後立山から黒部溪谷を挟んで日本海側(富山湾)に連なる立山連峰を眺め、戦国武将の佐々内蔵助成(すさのりまさ)正(まさ)を、手勢五〇名(九〇名)という説もある)を引き連れて雪の立山ザラ峠を越え黒部から針ノ木峠越え、三河の徳川家康に救援を求めたために、行って返したという伝説のコースをこの目で観て、今でも案外信じられているこの話にロマンを求め、縦走に参加出発しました。

七月三〇日(水) 晴れ

五竜スキー場のテレキャビンに四名で乗り込み勇んで出発した(八:一〇)。思い起こせば何十年前前にゲレンデスキーを始め、野沢温泉スキー場でリフト(一人乗り)を乗り継いで雪山を越えていたころ、五竜では四人乗りテレキャビンがデビューして、五竜はスキーヤーの憧れだった事などの思いを呼び戻している一五分で頂上駅に着く、さあこれから今日一日の山登りが始ま

った。亜高山植物の咲き揃った造園を通り過ぎ、地蔵の頭に着く(八:四六)、道標は「ここから五竜岳まで六時間」と記されていた。

これから遠見尾根を延々と登り、大遠見を通過すると雪渓が現れたので涼を求め休憩し、真夏の雪と戯れ、贅沢極まりない気分を味わいました。その後しばらく登り、昼食の休憩が有り、また登ると目前に五竜山頂が現れた、リーダーは頂上直下を指差し「あの岩壁に雪解けの時、武田菱が出現する」と説明してくれたので、見ると、ハイマツとダケカンバがなるほど武田菱の模様となつて生えていました。

五竜山荘に着(13:38)する、なんと山荘で働く人達の黒色エプロンには赤色の武田菱が染め抜かれ、何人かの人が忙しく動き回る姿は、さながらNHK大河ドラマ「風林火山」のオーブニングシーンを見ている感さえ覚えた。宿泊手続き後は、今夜の寝床を陣取りし、早々にビールで乾杯、この喉ごしがたまらない。飲むほどに酔い酔うほどに飲み、再び武田菱の話題になると、どうしても大風呂敷をひろげてしまう。

きつと、五竜山麓の人々はその昔、信玄公が北信濃攻略以来の甲斐源氏統治下で、武田菱の旗標に畏敬の念をいただき、その優れた民衆統治に期待をしていたのではないだろうか。そういえば、この北信濃攻略を機に、あの川中島合戦が始まったものでした。

五竜山荘の夕食はカレーで、ベタベタご飯は米を炊くのに失敗したのかも？だからメニューがカレーに急変か？それは、翌朝のご飯が上手に炊け

ていたので勝手に私が判断したもので、もしかして、これも一つの「武田流炊き出し術」だったのかもしれない。

七月三一日(木) 晴れ

朝食(ご飯、みそ汁、鮭、玉子焼き、メンマ、キュウチャン漬け、海苔、梅干し、たくあん)を美味しくいただいた。山荘発(05:35)目前に迫ってせり上がっている岩峰の五竜山頂(2814m)をめざす、頂上手前で武田菱を形造るハイマツとダケカンバを観察すると、なんと、その生い茂る様相は優美な花菱模様を造りだしていた。

注・武田惣領家の証は

「御旗楯無」その一つ「楯無の鎧」の金具に花菱紋が付いていることから武田氏は割菱紋を家紋とした。この花は大陸渡来の唐花を菱形に配置した紋で、唐花は想像上の花である。

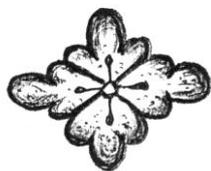
『武田信玄百話(坂本徳一)著』五竜の語源は頂上直下の雪解け模様が武田の紋章に似ていることから、御菱の山と呼んでいた、それがゴリュウに転訛したという説がある。

『日本百名山(深田久弥)著』

口弁はそのくらいにしておくとして、私は、昨夜の深酒がたたったのか、この頃のトレーニング不足が原因か、バテ気味でやつとの思いで山頂着(06:26 気温3度)、これからキレットを何カ所か真剣に越えて鹿島槍(2889m)爺ヶ岳(2699m)を踏破し、今夜泊まりの種池山荘まで一〇時間の稜線歩きが途中からバテてしまい、植物とか風景とかの余裕すら無く、ただ前を行くH氏の後を追うだけとなってしまいました。

しかし爺ヶ岳では、雷鳥が我ら四人を待つて迎えるかのように、ハイマツの中でジーツと動かず、こちらを向いてカメラに収まった。きつと雷鳥は、おしゃべりで不思議な二足歩行動物に近づいたが、その奏でる音色から敵ではないと心を許し、高山の動植物保護に取り組んでいる芦FCのメンバーと判ったから、大サービスをしたのだろうと、その鳩胸の微動から察しました。二泊目の種池山荘が見えたその時にも親子の雷鳥が二組も登山道を横断し、私のバテた足を止めてくれ、極限に生きる動植物から思考とパワーをいただきました。

種池山荘の夕食は、エビフライがとても美味しく、食事中の皆さんに聞こえよがしに「ファミレスのエビを超えている」と発してしまい、山荘に激励を送ったつもりが冷静に考えると、普段安値のファミレスに行っていることがバレてしまったことに赤っ恥。これも酔いが言わせた言葉でありました。



武田惣領家の花菱紋

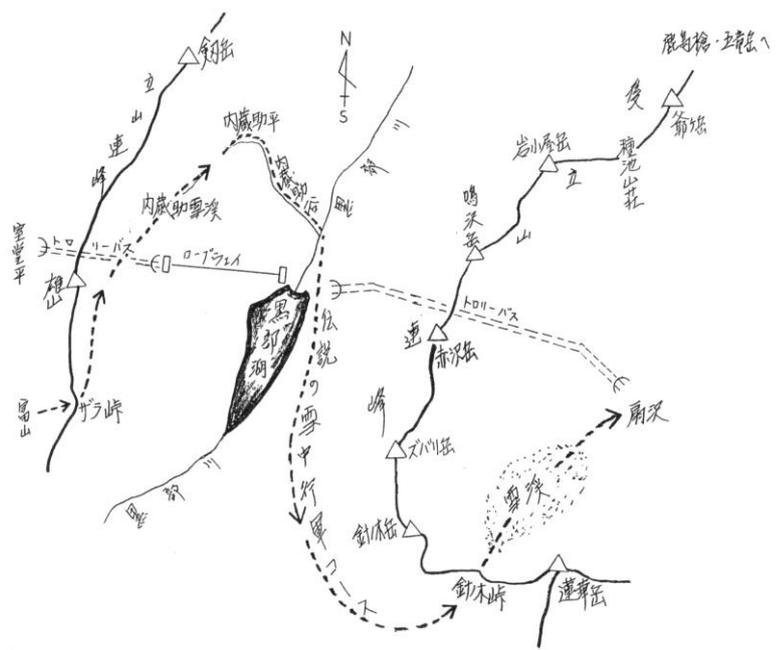
朝食は弁当を受け取り早立ち(04:47)した。この早立ちが功を奏して、良き結果となったものでした。

今日は、岩小屋岳(2630m)から針ノ木岳(2820m)まで五つの頂を越えての稜線歩き、バテ気味の身体にむち打って出発、最初の頂を越え、下ったところの新越山荘の庭を借りて、朝食弁当を広げる(06:40)。弁当は五目寿司折りとなっていて、包装紙には四つの山小屋名が記されているので、これはきつと各山小屋共通の弁当でヘリで荷揚げして冷蔵保存してあるものだろう、と山小屋食事通のS氏の発言には説得力があった。とにかく、立山連峰縦走中の朝食に寿司折りとは粋という外はない。

食事後は今日、二峰目の鳴沢岳(2641m)を目指す、鳴沢岳に着(07:46)すると、私の課題の内蔵助谷や内蔵助平が立山連峰に見え始め、今日、三番目の赤沢岳(2677m)に気合いを入れて登り詰める(08:41)とそこから黒部湖が眼下にあり、その先に立山ロープウェイが延びている。この場所こそが、佐々内蔵助成正のザラ峠越えコースが一望できる展望台となっていた。目前の立山連峰を指差し、あれがザラ峠、あれが内蔵助雪渓、内蔵助平、内蔵助谷と、地点・距離、コース関係をこの目で確認した結果。

とても、積雪一〇メートルともなる、冬の立山を越えたとは考えられない、やはり取って付けた伝説のコースであろうと私は結論付けました。しかしこの立山に地名として内蔵助

が残っているのは、勇猛果敢な智将を讃えて語り継がれているからこそ、この立山に佐々内蔵助成正が現在も生き続けているんだらうと、疲れた身体と脳裏でボンヤリと眺め内蔵助ロマンを追い続けました。休憩後は、四つ目のズバリ岳(2752m)、今回最後の針ノ木岳(2820m)を踏破して、ついに佐々成正が越えたと言われる針ノ木峠に着(13:00)しました。内蔵助主従もきつと、この場所で吹雪きを避けて休息し腹ごしらえをしたのだらう、と思ってみたりもしました。



伝説の雪中行軍コースを赤沢岳から眺める

私達も同じように 昼食休憩し、気合いと体調を整えて、これから雪渓を下り扇沢まで二時間半とリーダーは予測する。アイゼンを付けると雪渓下りは実にこちよよい、何組かのグループを尻目に特急列車のごとく追いついて扇沢に着(15:50)し、この縦走を計画時間通りに実行しました。

やっぱり朝食弁当を持参して早立ちしたこと、天候に恵まれたことが成功のポイントでした、と悟ったものでありました。

終わりに

一泊三日の山行きを終え、メンバーと別れ、一人になり妻の待つ家路に向かっている時になって、今回の縦走はキツくてバテて、メンバーには迷惑をか

けてしまったが、自分としては還暦のメモリアル登山で、念願の内蔵助ロマンを追い求め、武田菱の自然造形を観察し、雷鳥の出迎え、というおまけまでいただいた、大変ありがたい山行きとなりました。井口リーダーと共にバテた私に、時に厳しく、時に優しく、言葉と態度で励まし支えてくれたS、H氏にこの場を借り感謝の意を表し、「武田の花菱紋と内蔵助浪漫を追う後立山縦走記」を閉じることに致します。

佐々成正が雪中行軍の末、徳川家康と面接したことは史実でありますから。成正が実際に越えたのは、針ノ木峠ではなく長野・岐阜県境の安房峠だったのではないかと、九州大学大学院の服部英雄教授が「岳人」に発表しています。

なんと、安房峠であるとする、成正伝承よりさらに二〇年ほど前に武田信玄公が飛騨の江馬氏を攻めた際、二度にわたって安房峠を越えている。

『山の社会学(菊池俊朗)著』ということを知り、甲斐源氏の里に住む私としては、なにか優越意識さえ覚えた、二〇〇八年夏の山行きでありました。

※ 佐々内蔵助成正(一五三九〜一五八八)という人は、織豊時代の武将で、尾張春日井郡生れ、織田信長に仕え、朝倉攻めなどで功をあらわした。越中一國を与えられ、富山城主となり、越中富山の領民から大変慕われていました。

第十九回 南アルプス

芦安登山教室

今回の登山教室は第十九回目になり、九月二十七日(土)、二十八(日)に、山梨、神奈川、埼玉などから参加された十六名、芦安ファンクラブのスタッフの十二名、講師の三宅先生とで総勢二十九名で秋真つ盛りの北岳で実施された。

二十七日、芦安山岳館からジャンボタクシーで広河原に移動、参加者、スタッフを三班に分けそれぞれ班で行動し、三宅先生は班をvariしながら説明するという形で登山教室が始まった。広河原の樹木や、まいこの大岩などを観察してから、大樺沢沿いに進み、登山道で見られる岩石や植物など観察しながら白根御池小屋に登った。小屋では三宅先生の「北岳のあれこれ」という講義が一時間三十分程あったが、北岳バットレスや御池の出来た謎などや、広い範囲の植物、動物、岩石、山稜などの話しに、普段がむしやりに登っていた私にはとても興味深くあつたという間に過ぎてしまった。その後は大広間で三宅先生、参加者、スタッフで、S氏から差し入れのビールや自前の酒、三宅先生持参の小笠原諸島の焼酎などで夕食の時間まで盛り上がった。二十八日、夜明け前に出発、三班は昨日遅れたとことで予定より三十分も早く出ていて、草滑りのかなり上部でライトが光っていた。明るくなつてから弁当を食べ、小太郎山との稜線に出た。稜線に出ると真つ赤なウランマツツジや雄大な展望に目を奪われたが、寒さが厳しく、ジャケットや手袋など防寒着を着け、秋の三千mの高山を実感させられた。肩の小屋で休んでから、全員無事に山頂に登った。しかし寒さが厳し

く早々下り、肩の小屋でもてなしにゆつくりと休んだ。昼食は白根御池小屋で温かい物を摂れるようお願いしてあり、その為か予定より早く御池小屋に下った。小屋では大鍋にカレーが湯気をたてていて、炊き立てのご飯と大いに食



紅葉の稜線を登る

欲を掻き立てた。

下りは尾根ルートで、ここは植物の垂直分布が顕著に観察出来るところで、先生の説明を聞きながら広河原まで下った。しかしキツイ下りに参加者の中には膝ががくがくして遅れる者も出たが全員無事に下れ、ジャンボタクシーにて芦安山岳館に帰った。ここで終了式をすませ登山教室を予定より少し早く無事修了することが出来た。今回の登山教室では北岳肩の小屋、白根御池小屋など大変お世話になりました。皆様、スタッフの方々お疲れ様でした。きつと再び山にご一緒できる事を願って報告を終わります。 芦安ファンクラブ 井口 功

研修編 あれこれ

雨降りが恒例になってしまった秋の登山教室は、今回は秋晴れに恵まれ、

見事な紅葉が山々を染めていました。昨年の鳳凰山の講義で好評だった三宅八郎氏を講師に迎えて、「北岳のあれこれ」と題して、北岳の成り立ちを軸に、登山をしながら周辺の自然を講義していただきました。まず広河原園地の大きな「迷子石」、大樺沢一俣の「大岩」の謎などから始まりました。南アルプスが「億年前からの造山運動によって、海底が隆起して海洋底を形成していた枕状溶岩やチャート・石灰岩を押し付けられるように形成された「付加帯」と呼ばれる地層が山体の基礎で、この地質が四十帯と呼ばれているのだそうです。太平洋の海底が、北岳バットレスを作り二俣の大岩や園地の迷子石が氷河によって運ばれたらしいことを知り、自然の力の偉大さを再認識することができました。そして今でも中央構造線・糸魚川静岡構造線の活動も活発で、現在も年間4mmくらい隆起しているのだそうです。白根御池小屋での座学は、植物・森林の垂直分布、山の成り立ちについてでした。1万年位前氷河が発達し、その後氷河が消え去った後にカール地形やモレーンなどの氷河痕跡・大樺沢のC字谷、亦、激しい造山運動のために生じた二重山稜の講義を受けて、2日目は実際に山容を見ながら確認の登山でした。二重山稜は小太郎分岐から小太郎山に向かつての尾根上と、北岳山頂から北岳山荘付近にかけてはっきり見ることができ、山頂直下では、前日説明を受けていた石灰岩と枕状溶岩の変質した輝緑凝灰岩などを間近に確認することが出来ました。植物については、氷河の消失に伴って気候が温暖化し始めたために、生物は寒冷な環境を求め高緯度地域や



白根御池小屋での研修

標高の高いところへ移動し分布するようになり、このような生物を「氷河期遺存種」と言い、キタダケソウ、チョウノスケソウ、イワウメ、タカネマンテマ、ムカゴキノシタ、ムカゴトラノオなどが知られていて、南アルプスが生育地の南限になっています。今後心配されている地球温暖化が進むとこれらの植物は絶滅してしまう可能性が高いと言われています。森林分布については、主に下山しながらの説明でした。山頂付近のハイマツ帯、草すべり下にダケカンバ帯、オオシラビソ、コメツガ、ウラジロモミ、広河原のフナ、カツラ林など広葉樹と針葉樹が混成している状態など興味深く説明されました。今回の登山教室は、身近にあった山々の自然を改めて知り、この素晴らしい山の自然を傷つけないこと、未来に引き継いで行きたいと思えます。

芦安ファンクラブ 塩沢裕子

楡形山アヤマメ保全対策報告

今年度の楡形山アヤマメ保全対策調査の結果を報告します。

昨年の十一月十日に裸山、アヤマメ平に食害防止のネットを設置、作業の時には、お手伝いありがとうございました。今年七月十二日に植生調査を実施致しました。

裸山ではアヤマメの花は二株しか確認出来ませんでした。開花場所は登山道沿いのススキなどの背の高い葉に覆われた環境の中での開花でした。昨年設置した食害防止ネットの中にアカギキンポウゲ、コウリンカ、ヤマハハコ、ハンゴンソウ、マツムシソウ、テガタチドリ、キバナノオダマキ、ヨモギなどが確認され、良好に開花していました。



防鹿ネットの設置や伐木の作業をする会員



ネットの中のハンゴンソウは、百三センチほどの成長が見られました。ネットの外では、新たに、マルバタケブキも食害にあつていました。

アヤマメ平のアヤマメの開花状況は、登山道合流点付近で、二株の確認が出来ました。

ネット内での植生調査区域では裸山同様、アカギキンポウゲ等沢山の花が良好に開花していました。両地点でのネット内でのアヤマメの生育状況は、約六十センチメートルほど葉がのびている株を確認することができました。ネット外のアヤマメの葉は三センチメートルから十五センチメートルでした。ネットで保護した方が成長が約三倍になっています。

七月の調査の検討会を九月二十九日に行い、その結果十月十一日に、裸山のネット内を三区画に分けて下草刈りを行う事になりました。一区画はハンゴンソウを根から除去する所、次の区画は下草を刈り取りする所、最後の区画は何も手をつけたい所として来春のアヤマメの株の成長を見守ります。

今年最後の楡形山での作業は、南アルプス市みどり自然課主催で十一月九日に、芦安ファンクラブ、楡形山愛する会、楡形山自然環境保全協議会、くしがたやま自然学校、北岳ゆめ倶楽部の皆様の協力で、アヤマメ群落周辺歩道整備と新たに裸山、アヤマメ平に、五メートル四方の防護策の設置作業を行いました。当ファンクラブからは九名が参加しました。肌寒い中での作業、ご苦労様でした。

今年の調査の結果から、野生動物からの食害を防止するには、食害防止ネットの設置が有効であると感じます。

裸山やアヤマメ平の広範囲に食害ネットを設置することは、アヤマメやその他の花々を守るためにも必要ではないかと思ひます。

来年、二月に、第四回目のアヤマメ保全対策会議を行う予定です。来年度も引き続き、作業の際には、芦安ファンクラブ会員皆様のご協力をお願い致します。

終わりに、ネット内に沢山のアヤマメの花が咲くことを期待してペンを置くことにします。

芦安ファンクラブ 依田 正

ニューフェイス紹介 石川 剛さん

昭和十八年十二月の東京生まれです。仕事の関係で葦崎市龍岡町に赴任して二十三年に成ります。ポケットブック「北岳の高山植物」を見て、芦安ファンクラブの存在を知り入会させて頂きました。微力ですが、出来る限り多くの行事に参加し活動して行きたいと思つて折りますので、宜しく願ひ致します。

山のきつかけは一九六一年の三つ峠登山です。翌年、奥多摩つづら岩で岩登りを体験し、以後オールラウンドの登山を行いました。一九七六年まで登攀活動を続けました。一九七七年よりは縦走登山を主に細く長く山登りを楽しんでいきます。

ニューフェイス紹介 柳原 久さん

今年の十月に芦安ファンクラブの仲間入りさせて頂いてとても嬉しく思っています。日頃から芦安ファンクラブの活動は素晴らしい団体と聞いています。私も二十年前から仕事の関係で南アルプス山系には大変お世話になっています。

で、南アルプスの山々の自然を大切にしなければいけないというのとはとても共感できます。せつかく素晴らしい環境に住んで居るんですから、一人ひとりの手で守っていかねばいけないと思うようになりました。私に何が出来るか分かりませんが、諸先輩方に教えていただきながら、ボランティア活動を頑張つて行きたいと思ひますので宜しく願ひ致します。

ニューフェイス紹介 長谷部幸弘さん

今年四月にシルバー人材センターに登録し、六月にたまたま山岳館勤務の話があり、正に出好きの私にぴったり仕事なので即決し、七月から十一月迄勤めさせて頂きました。

縁あって、四年前に北岳ゆめクラブの特別会員になって以来塩沢館長ご夫妻、宮下さん、青木さんの顧問の方々を初め、会員の皆様には大変お世話になりました。今回、北岳登山教室のスタッフとなった二日間、ファンクラブの人達の山や参加者に対する純粋な気持ちに感動し入会させて頂きました。既に中高年者の登山クラブと歩こう会に所属していますがどのクラブを見ても共通しているのは「強い人程謙虚である」という事実です。ファンクラブの活動は多岐に渡つていますが、私もそれらの山の達人、人生の達人を目標に、ゆめクラブへの「恩返し」の気持ちを忘れず、登山にボランティアにがんばります。ご指導どうぞよろしく願ひ致します。

いっしょに、いっしょに、いっしょに活動しましょう！ 会員一同

平成二十年秋の樹木観察会

平成二十年度夜叉神峠・秋の樹木観察会は十一月九日(日)に昨年同様森林インストラクターの小松渾靖氏を講師に夜叉神の森から峠迄、十八名の参加のもと実施されました。

当日は紅葉も盛りを過ぎ、あいにく五里霧中の観察会となりましたが、黄葉と地面の落葉、樹形や樹皮などの特徴を手掛かりに観察しながら登っていきましました。木の名前の由来にうなずいたり、葉の形の説明に「魚の骨みたい!」の感想もとび出して、講師をうならせたりと、なごやかな雰囲気の中、峠に着き観察は終了しました。帰りは芦安ファンクラブの花輪さんの先導で無事下山し、山岳館に戻って来ました。



参加者から今回の感想をお聞きすると、「樹のことをいろいろ勉強できてよかった」「もっと葉っぱの繁っている頃にやってほしかった」「東海地震も近づいているので、夜叉神トンネルの向う側で地質の勉強会もやったらどうか」等の意見がありました。これらのご意見を真摯に受け止め、次回に生かしていきたいと思えます。

尚、今回は十月に芦安支所二階に赴任されました環境省南アルプス自然保護官の宮沢泰子さんの特別参加と皆様へのご挨拶を頂きました。ありがとうございます。

芦安山岳館 長谷部幸弘
名取 千春

北沢駒仙小屋あれこれ

ことしもおかげさまで無事終了です。

北沢駒仙小屋管理責任者

芦安ファンクラブ 井上 佳之
黄金色の落葉松が葉を落とし、北沢峠の美しい紅葉も終わり、駒仙小屋も小屋締めとなりました。

今年の始めは、長野県側の林道が去年の台風による崩壊の復旧工事で開通が送れた影響もあり、小屋開け後しばらくは静かな日が続きました。が、海の日の連休からは、例年どおり夏山らしい混雑が始まりました。忙しい日には何かと事件がつきもので、今年の最初の連休は、特に忘れられない一日になりました。



ヤマネの赤ちゃん 無事でよかったわ

この日は予約で既に満員。長野県側からは、朝六時前から続々と登山者が訪れ、慌ただしい時間が一日中続きました。なんとか夕食も終わり、消灯を迎えたその時、閉めた受付を叩く音がしました。何事かとドアを開けると、宿泊客の一人が困った顔で立っておりまして『布団の中にヤマネが・・・』寝床を見に行くと、そこには産まれたてのヤマネの赤ちゃんが二匹、不安そうに震えていました。赤ちゃんヤマネを安全な場所に移動し、一件落着。と一息つくまもなく今度はけが人の一報が。小屋前の沢に宿泊中のお客さんが転落し、救急車を要請する騒動となりました。ちなみにこの時の赤ちゃんヤマネは、後日親ヤマネとめぐり逢い、無事に

巣立って行きました。また、救急車で運ばれたお客さんも大事には至らず、すぐに帰宅できたようでした。その後、天候に恵まれたこともあり、お盆前くらいまでは宿泊者も途切れることがありませんでした。

お盆を過ぎると登山者は急激に減少し、九月には、連休を中心に週末のみ賑わうようになりました。秋分の日頃から木々が色づき始め、体育の日も過ぎた十四日には仙丈・甲斐駒に初冠雪がありました。その頃にはテント場の利用者もだいぶ減り、小屋泊まりのお客さんもほとんどなく、日帰りの観光客が目立つようになりました。シーツの洗濯や布団干し、ストーブの設置に廃材からの薪作りなど、冬を迎える準備がこの時期の主な仕事になりました。また、気になっていた小屋の屋根の塗り替え作業もこの時一気に行うことが出来ました。今年の秋は、林道工事による南アルプス市営バスの減便で、お客さんが激減する心配もありましたが、終わってみれば大した影響も無かったように思います。管理人として初めての年となり、不安もありましたが、大きな事故・トラブルもなく、今シーズンの夏季営業を終えることが出来ほっと一息ついているところです。